# 新著聞集

四

一三四

# 新著聞集

## 佞奸篇第八


機嫌妄語

偽金恠人自詐失言

輕蔑の少年即被殺害

佐土原の城暴逆殺傷

寶塔九輪下爲鑵子

鄙悋命と損す

不貞の寡婦二盛二裹

狸人と妖し却て取扱

無根の詈言忽損身命

尾州廣沢親王

佐土浦中題目妄說

本滿寺像諍論異師

## 機嫌妄語

尾州松平薩摩守殿の近従の士初て子を設けしを
きこしめさるゝ故ハ子を抱らるゝ時可参かゝんと
仰られしかの人畏り全く左ハ申ぬと上しを
何条かゆゝしく存てやいなし再三申しを誓言を
立られしとの事なれとも生産をかゝせられ子を
なしがたく思いる故の邪見のゆへとて人に尤名いとて
そすくきわ家ハ叶ましてや段易し恒に
殿のきこしめさるゝ者かしき者

さはりしめされんとはかりひとうしうも来りあ遠
して身の災くちりはらし

不貞の寡婦さくび壷やくひ裏

信州下伊奈郡下淵村の庄屋七右衛門者の家来の
市ゝ女顔かくちりてやうりしらば誰人の媒ふてや
落堂大まひ為て見へてしに庭先双方なくしして
手具足ようとしし矣衣裳ぬ泉くくよもり矣為あ
しきり右世ばいなきいえふしにや絶て方ばゆと
うして古にてうしをうしを又いうる縁ひきばうん

原半左衛門ゝ代変ゝ蓄に立迫られ契約
ばう中ゝ獣り娘と設しぶ丈重き病とうあ家しく
塩ゝ下瞳ゝて絶ゝ家ばうて後家にうしを
美百村乃百姓ゝ誘いまと負如れんもうて沿ひ絶
ましふいこ美くしき如も皆代よかしばまと肩に
ゝ春ゝ鋤鍬とうて耕やゝ秋ハ稔と携稲と刈
ばうぬ拙き業ゝ身とやりしゝ者也

金と伝ゝ人と惑しゝ自詐言とうしうゝ
代見の表屋毎日京上るに乃るは乃みゝ老人後

ゐる呼うゑ其方ハ落しハせぬかとて黄金一枚ゑせ
ゐるとゐ為ちうして頃て取てゆんとするに老人の曰
大分ものを拾ひ内いしするうせたて酒とりをもる
ゑせよ若欲をはるしハ其ろしハ飯さぬてもいさんとはを
ゆうして云ーうば詐りうて金一分ゆるへし同類の
者も往来の人のゑしたるし一枚乃金とワれ一ゑ
てハ誰も買いきゑれと口くに云しうば金一両ゑ
せて互てワきてゐうり両替屋件の判金とゑを出し
うれど贋金ちうり切ハたしぬうれうにもしゑと

ゐ者とうゑんとん掛ゐるう頃の狂乱てせり合し
ゐば捕へて道さしと云狂者ハ思ひゐうきゐる
先度の金ハ其方が為したるてハうしや妖ゑを贋
金ひとうゑかゑ付ゐれど面ゐる屋ひふをまう後
を却て俺言せ剣へ金を出してやうゑ切腹ゆし
ちう差人て頁をうりゐるゐ乃ゐにゑを人と
いひゑて

## 狸人を妖し却て取ゑ

下総国私法寺乃日蓮ゑ彩像毎夜讀誦ゑたるふて

辺の男女寄て詰でゐる住吉日堪上人心もかゝるに
ゐる衆多僧の人々さえなお像てしかし法問の奥儀を
きつゝて若は逆ふくば是ゝ捨んと責しかば
何の言へもなりし上人頓て斧とりて木像を引
おろしゐれば後の方ノ古狸逃出るを追たゝかし
討殺ぬ

輕蔑の少年即報害せらる

天和三年の秋吉良上野介殿子息三郎殿大家にて
逆勢の侍少場を切りかけて人取ひしぎ仕らふ
奥方なる機嫌よくて悦ひ給て重ね肉ふゝめで取
なへ出されしを関ふ者山場をひしぎ
早しき者なる是君の者の志似として賜はし酒肴
何の恥なりや武士たる者の喰へきうは某を
人形なぶるにもなじと散くゝ割るを
怪かゝずの猪藉やおのゝ思ひかぬ少ぬ部て
誰そむる人なりはし翌日の表て法系隣の部屋に
ゆき餘の者も来り酒のまるて件の少場をも
呼て一盃呑せて又一盃とてめられでイヤ法系ぬ

終しじ碎てハ出がるしに亀しと云へとも拐しに
孫兵衛が曰く人が留しきるいと奴なりとて絶かく耳と
拽これかくも呑ぬきかと責れとかく二三
献傾杯しに餘の者ハ殆く碎うて門みしに
に忘も云れぬる仕散す音の笑へしなば亭主驚
頓て走り出んの所くに伯やかぶく仆抱とし
なの隙う少場を孫兵衛後うに陥り咎うめ
拙搭うて突ちるとき云ふ忘のき しらば
亭主立戻る双の中を押分しるふ人ハ物まる

出合扱しこが幸意ハ遂ぬまた貢セしに幸
ちまバ奥乃親里上板為るを仆人寿りたりして
立合少場るご口書とし市に過しの日の悪口又 年
沙おより改でくる手を担ちどセしと口惜くなりし
が若年ハ場をうしてなりしば安まて堪忍し
作し出るう今あもかくなりしかで隣の人ハ亭主
もたくセが故ときすに案人うう雑とかんもいると
たあくいしうう隣の人痛く碎て皆りしと亭主逃り
如ぬ爰うに寃竟の附しに思て仕り代りしし

和意を遂ずおもゝしく妻くらし先年
負の疵出生し者多く業法へ教師を立厳へ
れ一こと告しらし小弟不作法者ありて切腹
らも少場るものハ神妙乃者ありて紙代ゝ
きをしらし

無根の詈言たちまち身命を損す

ハ下谷ゝて切る浪人へ通りて小便せしを侍
人通りて刀ゝ切るし如ぐ切ぬ神ゝて之注
浪人なるしハ仕人見ちゝぎれハ意恨ちるべき

かゝしハ自分の料簡也とて逃ゝり走り付き
切るのゝしお定めて出分のかゝるのにハなし但し
いるるのもやとて紙ハ染ゝ後やゝる後迫や
ゝ先ゝ切まとし出ゝ慰慰ゝ礼をおて別て
ゝ級連人ハ一町ゝ切ゝて追付
件の荒場と通ゝ連人ハ以のの家色となし
乃の云ゝて少ゝ何系討すてばゝや後ハ乃
ぬゝしと散ゝゝ詈言ゝれゝこゝとハ何のゝや
きゝひゝ意恨のちきるゝれゝ討果すべき謂なし

をまつ我を腰ぬけとゝ云〳〵堪忍ちうがゝ〳〵わゝて
切り〳〵まゝとあをとゝて出ぬ名をちゝして討〳〵うゝひ
をうゝつをを負〳〵取へ浪人町中の諫ぎを禁
翔法をうゝひ尺しゝ小件乃人血刀つすがうを
あれゝこゝいちる故てやゝ近ようるの要を問
ゝちゝくゝと若人ゝをまゝ道ゝゝて追り事詞をかを
造作をかくゝ切はせ首を堪立かゝまをつをつをゝと
ゝゝ此ゝ新ちうひよるこゝび怒てゝ礼をはくゝし
礼ハ喧嘩の相をちゝまゝハ喧騒すゝゝしゝゝゝゝ浪ゝる日

地の者ハ集ちうゝ〳〵ゝひふ利遠んとゝちうゝしゝみ
町人おゝるを推ゝあ奉行取てゝ為ゝを一ゝ地の訴ゝ
ゝゝば楽ゝゝく夢切ゝをせ 上へゝゝゝかくひをゝしゝゝ是ハ
喧嘩てゝハゝゝうゝ涙乱心ちゝ何も狂ゝのゝゝゝと
作せゝてゝ深ゝゝゝとゝゝ

佐土原の城暴逆殺傷

日向佐土原の城嶋津右馬頭殿今ゝゝゝし今年
脳をハ不憚乃ゝたゝゝして兄右馬頭殿てゝ鴆毒を
ゝ〳〵ゝ為ゝて遂去ゝ〳〵ゝき婚子飛弾

守殿家督受させ給ひしに又延宝六てう毒を
盛いらせて卒しぬ飛弾守殿の嫡子又吉郎
殿ハ三歳にてたいせしゆへ其家督を
継給ふ乃子息式部殿ひとりまもなくに二三年
経て此方へ継給ふ家臣の松末左門とめされて又
吉郎殿のハ祖父しうしの薩州の大隅殿の御抱
式部少輔後見ハ求馬詮ちきゆゑ也と
なれを左門領掌しに又吉郎家老
松末惣右衛門を招きいらしにやし

祖父先考ハ兩君ハ既に失せ給ふ今ハ家の
君を國守と仰きまるのいるふも頼とするし
給ふ式アル心ひろく國をおさめ給ひ千秋
萬歳の壽をとなしつまく孫子繁昌もし
給ふべしといと懇やうに詞を結て速しに怒
右衛門以の外に顔色をかへ申の實に
さらにあやまり仕て似合ぬいひうを去りも天
罰乃逃まさるを心強て止給ふ我も
一段のゆるを加へ密に上人口外を

じと堅く誓言して立ちぬれのちを脇指ぬき
仏猫も止ぬ左門はみな舌をぬいんとなりひ
惣右衛門ありてかの立遠かりし先かまをなきぬと
さんと方便をもぐらしみな舌をのの毎儀と思ふ
と密るのありしと踏取きるを立ちくしく結ひ
ずーしかるの薩州て訴へしかば大守大ているを
きるひ則ち検使をけうされ俗の穿議もなくて
惣右衛門てり切腹せるをけうまれだ清言はは
何らにも罪まり入ん俗ちぐしかるやりの多ぐさ

ばるの是非てり及ずそてみな舌多なの抱守を招きを我
今度讒者のあてを出すのをにけうびを名を没
後まて清するいるを口れきるにけうし陸ら
て若驚乃ん抱大切てりけうまて朝夕迫ぐに
紙と入食迫ぐを辛余てりまでのくとぐく
云迫ーしかるてり除こしたけ合しきるのも色
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し
けうーしかるこてりれひ合をを結うけ切腹し

仰せしする憤るべきにあらず者數多ありし
ど名々口々に開てやまぬ左門ハ殺もみな多分と
笑りんすとまもるひしひしめで用心きびしくそなへ
今ハ遂げしうば祈願所の國貫寺ハ西うま
思ひきりあるる底ハ[illegible]てみな多分と泡ばかり頼こ
しうばるの猶ものの色とえうりいにも安きの
やと仕く領掌して則ち甚夜ひそかに薩摩に
こしかの荒増訴へして詳ふみやつ面を
切いちる思ふ水波傍と止めたるひトのるまを

聞へさせけるぬ底ハてたりせるとみち御朱印
改の名式アを改めて名と願ひまりしば公儀ハ
仰する不審とて大隅殿へ達るのしたる大隅殿ハ
仰ぶし誰がヤ上しどく穿議のせしに左門
を取爲ものしうば貞享元年ハてて在番竜
て入させ同三ものの父子三人薩州ハうば
禁獄しに拷問せさせられど前妻の積悪れハ
ち白狀のうへて首刎らるしに同年二月に
薩州ハる佐土原へ何とうく諸士ハまりし

聖朝を脇目奪經て出らるゝを諸士取巻て
佐和脇切るを世間へハ頓死と披露せ〻る其の
近従六人うちも薩州てゝ討れく首刎らるゝ
佐土原てゝ左門を嫡三郎四郎及び三男を撃
めうちかゞ冬ゝずゝて左門お館てゝ竜りし
うば足軽三人てゝ急きかの者ともを討取るの後を
蔡り塀より下るるを左門お拉めの中うを
矢てゝ三人を射殺ゝ後炮てゝ三人の胴
中を射ぬき後るる僕従てゝ共てゝ死ぬ

すると數多の勢も取ゝ戸扱を打
以て崇ゝ防き戦ゝこバ容
易てゝ責かくて大矢を放ち燃乃しこバ防ぐ
へき便なくて猛焔乃中ふ倒き死て男
廿七人女子七人出家二人足一人都合三十七人同
ゝ煙ゝ大坂天満のさん場てゝ大記と
いへる傍乃佐土原乃侍て件の悪逆妻く
ゝる人てゝ左門いぶせくや思ひ
強ちゝかのゝ呼下ゝいとじく蟄室といと

安穩にくらさせ給ふく毒をすゝめて殺しして
ありし後東南禪寺に一左門が弟れ伝乃しら
大坂薩摩の義屋敷にて所をて兄ちし者乃
重逆にして新撰組ちもくくく滅しくるひしう(ハ
基も遁るべきなかしいるにも合罰乃くせ
まをけうまれで風を居のいくく支にハ沙門のの
ちれで移て構へべきるにハ伝ちまもも一注國た
方へ相まるゆ等ちく左右すべきと伝ちしば
ゆの夜邊ちき納屋下にて自害せしがも

歎せざれば京都にて送り伝し是

尾州廣澤親王

尾州松平出雲守殿屋敷の為居廣沢角兵衛を
貞享元年の春卒しぬ息平九郎八十三歳にて
儒を学び歌を讀手跡拙くして俊逸なる
しかるれ障りなして親の忌中に一族と
不通ちしを却て幸のすにおるい若き因迫と
伝りめ伝宴歌辞にて日夜をおくし十六年にて
身の長五尺ゆの粧ひ美双乃美男にして

大人の相乃り然るに禁道信人の萩野柳意と云
者日ころ出入せしが乃ち付嬶うり乳母お湯り
しハ平九郎乃ハ正しく新院様の若宮にて
乃ちせきるハ御母ハ院乃官女にて汗腰胎
乃しるを乃腹ゆうて仆許て越角さと
支婦乃ちゆひめ妻細て少せりれば平
九郎本より高しきまバ仆のを少よりす
るにも左乃ゆべきすもいく袖すきいく
るし支こ美麗と好ち柳意頓て仆腰

龍之介乃茶屋青木宗智をかくし進付大内乃
汚むひきして披露し頭しも道具を拵しに
ハ金銀の茶碗回く莨菪盆黒ぬく四足の長柄狹
箱梨地乃長刀その菊桐乃紋を付し冠衣
衣その外諸色品とを添へ下この器物衣類乃玉
まて美こしかし平九郎を光仁親王と号し
宗智が姪の十歳乃ちを姫宮様として槿の前
と名つ乎宗智が茅門前町の古著買七右衛門
と桃園中納言為綱と名つ乎乳母乃所縁の者の

伏見てゆきしを御後見權大納言と〻柳意を
正三位中納言行兩と〻名つゝ宗智を三位法印
安齊と名つゝ宗智弟青木惣十郎を左少弁と
し宗智妹聟乃上畑町の絹賣藤屋平吾衛を
右少弁と〻なのらせ面等以下諸役人もそれ〻
てゆきしかゝる企を伯父の齊谷甚左衛門迚付
近年不通のうちも捨置やゝ〻て委細を
老中へ訴へしうゑ竹腰龍之介家来竹腰宅を
方へ行啓ていとゞき餐を〻せ〻とさゝへ

足輕大勢馳せかこゝ名〻を生捕親王を龍之介に
渡ゆゝ事あり〻〻板かこひて柴乃幕を張きし〻く
番人を付ゝ見し〻それ時乃歌て
思ひきや八重〻の雲を忍ゝて今の重の君を乃ゝ
柳意宗智ハ手鎖て残る者もハそれ町〻に
渡頭事ゆゝし柴山外記て打をて京都へ詳
らか〻渡ゆゝ委く穿議し〻ゆゝ是を
柳意ゝ謀計て窮り親王ハ山村甚吾衛宅にて
切腹柳意宗智それ案の者ゝも牢舎して首を

刎られ戸鼓ハそまつて言へてもあり宅をも切腹森佐吾衛しゝ入る者も取持しゝ入切腹せしゝ女ともハれとて追放ひらしゝ

宝塔九輪下て鐘子となる

石川玄蕃信州松本て在して王子の宮の宮を下て建しゝ宝塔の九輪をたゝ鐘子て鑄させられしゝ塔ハはゝ破壊しゝかゝ無の振廻ひらしゝ故てうを呼てうを家ほろび帰しゝ佐渡しゝ

佐渡流中題目妄説

日蓮上人佐渡流刑の時かの國松が崎しゝ入る庵てて妙法蓮花經の五字を浪て書ゝ置しゝ今に此の面て彫りてるしゝかの宗の僧俗ハ此に不審くわりしゝ佐渡國のもりてたりせし若根を多来て一覧しゝはゝの我も少及しゝ由ゝ来しゝ詮義を遂しゝかと更てはるゝ乃佐渡宗旨の筆ゝ寄持と云んその虚せり

## 鄙悋命を損す

江戸桜木町にて[illegible]者は甚悋くばりしが長病にて不食せしが焼塩のみ、更に何も喰はずして妻はまりに悲みて鯛を調へて料理せしをみかねてそなたん何国より来れるそ幸みにて求しといへば[illegible]の秘蔵[illegible]ばなよと散々に言ひしを隣の妻ゆゑにて伴ひ魚を買取てみかねが子に喰せてしに二切たらずあるをみかね自ら喰あるを何とせして甚くるしらを絶炙する中に名醫師来て氣付と口に入れども歯を噛みて明け脉をうかへば怪しして目の中も冷しかりしいるの[illegible]やし四葉にあるに妻さらへて病人の耳に口をよせ什こそはハ振ひふるぐ云しかば甚の口をひらきて呑しさらに然まぐも吐き泡て菜刀ひざしハ絶えしかぬ跡に金三百両乃し

と後家子をたのみ縁に付ることを

本浦寺像詳論異師

海陽本蒲寺の日蓮ハ像ハ霊験ましてはなはだ
国家の崇敬ましまする所像すこし損し
給ふて佛師を呼して佛師がいはく山像
と日蓮の像を改めるものなれば何ぞ問ハ往昔ハ
あるにて弟子国者の若法師ばかり者会はせも
文蒙なる佛師乃云るなる辱も此なる影ハ北山
芹生の里の土中に久しく法華經讀誦の音聲
はしらば此寺の開山聲とさるべき堀出へば
はるかや大聖人の尊像なりたはせし知はるを

さる彫ならるる大悪人散々に刻りあしで
佛師堪かねて彼ハ名ばかり僻るにてはあ
し是ハ海ぎれもなき元三大師乃影也と互に
口論せしはまりて餘多の法師佛師が頭をも
損じ給れど内證なりて事おさまりて所の
牧野佐度守なるさしに佛師が
ものすの證拠なりやと宣へハ佛師ごいはく影ハ
御首を破りて見まるべし若日蓮しなるバ某ら首ハ

又仮名にて問ひ給へば一訳乃返答なり
しゆへ其方より醫師を呼寄せ
職人の手うしを其日數を積り
なるべく急度
捌きをつけしまを内證より催言
白銀二十枚たくはへを

# 新著聞集

## 崇厲篇第九

龍宮城を語て喑唖乃子を産
慈眼大師茶敬ろぎを罰る
安宅丸の精織しきの踏すを罰る
柳津の沈の魚を毒殺す
祭酒を砕粒す
佛像の釘を掠めたちまち四指を損す
佐分谷乃稲荷の神木を伐

神木を商んと欲して材没して人死す
愛宕を凌蔑して餓死す
釋迦の像を詈て顔格子に附く
鉈を敕してきちがひす
天滿宮を廢して七代早逝す
祇園御霊の祟
古碑を礎として霊魂夢に入る
鉈童子をくらひ家族悉く滅す
天神の池の魚を捕裔熟して死す
庚申祭の夜幼樊に入て死す
日待に誓て子樊を被て斃す
參宮の者鹿をくらひ身を終て肉食す
惠美酒神居をくらひ竹を枯す
高野大師の命に背き火災
曾我の神祠を輕蔑して狂乱す
愛宕の境内を横領して火災
問者の役を拒て脊に瞳て患て死す
女人高野山に詣て害せらる

龍宮城を語て喑唖なる子を産

遠州天流の川筋なる鹿嶋村きんぱきれ嶋作の
おれ私なるを回し継の賀茂村の平助亡妻と
いふ者妻しふ川中なて私動らばしらば名く
色とらしなひ君ある何とし事にや亡妻私
らう飛そう水底なる沈しうう私ハ亡もくと
向の岸に忍ぬ立妻が宮なる学て甚い嘆き
しかどすべき法なく亡妻日を送る既なる三回忌の
追善せし付ほとなくかの亡妻飯りしらばコハいたし

と人々驚き怪狸の妖怪なりやとなやましかど
何の不審しきもしらしかば皆々安堵しあり
その由を問しうちまもり集何公もなく私ら歌
て竜宮界なりぬ竜神のわが力を頼りて
きしかど拙なく論じ合て海さばしかば彼方ハ
一あるとおもしに拙ハ三度敗ることあるを
拍子龍宮のいくさ人の問ものびび
語るの勿きて堅く制せらるるとて初ハ云ばり
しが道きかぬるてくばしと海しと也

その子産しに子ども兄弟ら哑にてばしハ
かの界のる語れるなるやその言葉ハ十歳ばかり
なりて天和二年の今なる命なりし

慈眼大師恭敬ばるるを罵る

江府東叡山なりて兩大師の像天和三年五月に
等覚院なりいたせしなる経ねの公等閑にて
恭敬等も怠めるるなるを召仕の僕なる物つきて狂ひ出ハ是慈眼大師也
はべり當院なりて元三大師御脳きこしめるしば

ものゆへハ院を粗畧てもてなし給て何の辨へ
もなき小僧なれとも評聞ちゆへせしゆへ諸人の
信心もうすくなりぬかきこうれ評を立て叶ハぢれた
大師てハ何の評定もおハせぬ自見道し
てハ成なりと思ひ給へハ名く怖れたしと
早く体驚をなしめ評聞おも老輩を出して
祈れて叮嚀てハ恭敬せしゆへ塩の一ときハ
夢乃醒るさまに本性てなりぬ

安宅丸の精稼しき人の踏すを詈る

天和年中て安宅丸の評紙を由きて解ひきて
祈れてハ拂ハ
和泉殿橋乃ほ屋市を乗しいふ者板を買求て宛稼
乃さてハ
我ハこれあ書丸の竟ら
蓋し稼ハしき雑人原て踏せるこれし意恨
なまを一くて百敷さんと詈り亦亭主たるき
いそき作りくやさんと改をきて住言せし
うば物付ハさを作りし

柿津の池の魚を毒殺す

出羽の國柿津の虚空蔵の池に鮮魚おびたゞしく
ありし蘭生下野守の入まいりるゆへ
毒を流し入れ殺す人しとうり者れば是ハ往古より
殺生禁断の地なりしを違ていまゝかゞ例ふ
殺しゝ者ハず悉く殺されし其の日より十四
日ゝ間大地震山ばりしなば山ハ崩れて河
河ハうばりて陸となり家中ゝとゝめ民屋ゝ
摩頽して人多く死ぬ是より行脚の下僧

家ほろびゝ者ひゝハかくばかりとぐあるなり

祭国寺粉

ゆゑ下谷の者上野の大師ゝ日参しゝ日三十
ゝくくして三日目ゝ者ゝ呑てかりしが
俄ゝ狂乱し大師のゆをゝ行せる者ゝ
者ゝ口ばしる者ゝ延宝八ゝの世

佛像の行をかすめ忽ち四の指を損す

延宝八ゝ年ゝ者の大佛の八佛供養を
して大日如来のゝしるの行をなしゝと

宗心といへる道心者像の腹内よりさしのびたる釘の
かしら四ッ出けるを鉄槌にてうち曲抜んと
せしかど叶ハざりしかば腹を立て出しけり
堂の上より不思議に材木落かゝりて指二本左右ともに
うちひしぎけり其後も怪我ハ絶ざりしとなり
されバ釘四本ありけるに指まで損ぜしも不思議なり

佐介谷の稲荷の神木を伐

鎌倉の佐介谷のいなりの別当ハ扇ヶ谷の佐治太郎と
といふ者の弟なりしが社内の神木の老木ありけるを
きるを憚もなく多く切たまて家の脇としけるに
頓てはとがめけるにやふしして妻子ともに狂乱しけるを
扱れバ又憂すゝみ又老年の母ハ歎きて邪見放逸
にして後世のこと夢にもおもハざりしがかゝる時三災
ありける孫を切て見せよとハかたく責けりしと
佐治太郎何と思ひけるにや忽として無慙に
孫を切てこれ見よと申けれバ老母ハうれしげなる
我もむかしハ人の下にハ立ざりし角なりしき
御身もなくてハ勇士とハ云がたしとて悦びく翫あり

ものゝ延宝八庚申年十月廿日俄に大雨し雷鳴
はなはだしの災と云三ツ引さきより作左衛門
迷ひ自害して死しぬ
神木を商んと欲して材伐し人死す
常陸國久慈郡真弓權現の山ハ大木稲麻乃
しゝ生ぜりし神代権現れしと更へ
木の葉一ツ宜く取るをたゝれ給ふ不可伐
宰相殿乃法度人へ訴へ出乃末を伐てハ
家を出しなハ利倍なんといひしに

ゆゑの故にたゝりとして頓て家内ぶく
病法松ひまを入を里川しいを取まて伐出し
了ぬまんとせしに其の夜雨風烈しくして材木
悉く流れ出ぬ方なく有りし大乃金銀をいま
由なきものしもし何と面目なんと伐出自
報せしかを搭乗人もきうるゝ孫バヽ山へ行て木を
伐て一夜伏しなる山鳴谷響して驚しかり
なれどいなるるをそ百余ケ取て懸とき
し木屋の人とかるき嘆ぎられるすなりと

ひく神矢の清らかなるまの中をしるしを伺ふる
ものなるべきやとて伐て切る枕十余人ともに
焚て炙すに焼もおそれつるき
命くも逃かたしとは誰をて伐んと云ものも
なかりし山ハ一里ばかり蕪湮なるに切り伐し

愛宕と凌蔑して餓死す

大坂の玉置事トといふ人の傳屋の祖信や長兵衛い
日蓮宗なりしるはる時他所より愛宕のれと穢
と土産にたりし妻ようとび戴しと長兵衛

沒のかて嗔て様を押切れをひきき溝にすて
御上取てみとて山ひく嗔に右のまに飛火セ
しを去排しけるに腫いるむの堪かくて何の
所作もなく日をつもるまを送しを朝夕の煙
もなくて妻も離別し甚ものもなおくを食
とて則ち所の辻にて餓死せ地鞠の
飛火ハ常にてしるもとぶ憂まて
果しるハ偏に神矢を歎し謂て
釋迦の像と罵て顔撫まて陀く

京百萬遍回禄して後元を東河原に移されの
し釈迦の像大佛ちれを造りそこに新たに造
と車にて乗りうつり日蓮大納言殿打しも捨て
ゝ新堂如しにて又ひ要の新堂の首を引かいて
ゝ智められしぞ仏にそのまゝ新堂に
ゝ仕て離さざれい大におそつきさるく僧侶
まゝしく佛く離れし忽ち日蓮宗をひろ
百萬返乃中養春院の檀那しにて
釋迦堂ハすゝちち大納言殿を建立しあり

鉢を叡して忽ち歩す

出羽の國最上源五郎殿の菩提所竜門寺の鎮守
ハ龍にて仏ゝ古より云へしに仏名同鎮守
乃不拝岩まれど人ひまに集りしに仏を
まく見ゝ而にて空すゝの鉢の出しを
追ひして叡山にて叡山者ともたちを
眼ゝ立取て歩しぬるの追ゝ案を
み空はぞゝ煩しと也甚ち胴太くして
四足ゝ面ハ全く絵ゝ写せる鉢形にて仏

地の鼓舞今に伝へ侍し慶長年間の

天満宮を廟し七代早越す

八條宮の桂川の御業に入るハ西嵯峨村にあり

御殿のしろる丘林の中に ひしよう天満宮

乃祠にせもふ松宮のいるるもの

日蓮宗に傾きもひく彼祠を破てゆ

跡に三年義祐堂を建立ひしに天満

文枕に立せかく廟社ちしにしら崇

せんとあしもふ驚きなのちくに

造営ひくれて更に社無ひけるハ

ばしに俗云の為して家名を常磐井と

京師にひろもあるひしも此所

七代にて西ひもひ

稚園に厳の崇

尾州津寺戸四所の天王社祭に御霊といふ

ものに八月八日疫神を霊の中に封して

川へ流すに其ものあるに疫病やて

神をすしめあるうち作麻羅として其村其里にて
踊るうち延宝二年戸田の御麻樊田へ
やうやうと甚比白鳥れ大山や仁左衛門と云者祈
幕を拵へしをうるに人お祭し幸せるうとして
作りつゝ市右衛門大山へ切て高代
人が西蓋にて出て一度も踊りに村
人も集りて行れを御門の踊りとて
してきれおろう御人大樊にて出て
祈遊の如原うにつゝ拵ものとて言くふ

剣り荒紙うり出るの形よ成りて又名古屋うり
今村二郎兵衛と云者出るを角右衛門
美濃村長松寺にて吊乃齊乃しお妻は伯父
中村弥右衛門の娘の叔父弥右衛三郎も出るうてあるう
此人使ひて作麻へまりんとうれで下人作麻
ハ蓋神にて海しすよ角右衛門と強て
いさめしうるを更て用ひく怒て拝しかるよ
毎人ともうて御うり悪寒し足へ多重うてあく
宅てかくぐうるやいるや大樊発動したる言

山すそ近く法華ハ六百年ぬを経ハ年
ぶるを燃て後すてゝ起石にしきれどもき
うくとまり言して一夕経て成るを

古碑と礎となるし霊亀爰ニ入る

奥州二本松の業研や久心くを者産て仕うて
国原の安全寺乃山ニ苔生古いる石塔て立て
踏石ニかしゝ寺ゝ甚ハ怒しき爰を入る
ゝ山くゝ乃しいる間至産やしに若き女いし
姿ニて来り秋久しく住れし取て引殺

是へハ何て連来れるやと怒れる眼ハ
しきゝ胸ゝ噪ぎ呂恬然として裏ニ行て人を
ゝ乃ぬ山の恐しくて山ニ入て洞乃底
いる老人のいく山ゝを石ハ八千年ぶを畠山重次
と云しゝ人の娘ハ七ハ歳て身病ゝを葬し石
塔ゝとして侍へきしいる山爰ハ荒れて住るん
ゝくなのさゝろ迫されて悲しきを迫て
せしゝ爰止しゝ延宝乃中乃ゝ也

蛇童子とゝゝ家強悪く滅す

伊豫國宇和郡龍ノ池の庄や竜池大蛇ゴ居
ぬハ古へ竜の住しゆゑとやさきハ庵て
ゆゑ三日天の池なる水堪て旱にも乾ることし
寛永十五年七月廿日一ぢれ者も加御
ちゝて大なる頭と煙と共にいる
すりゑん大なる夫婦いきらし住しゆ腹とて
霄ゝ奥の方へ入窠てゝ子を抱て寐ゝ
してかの子アツト泣しゝ大なる蛇
ゝ子ゴ片脱と呑ゝ咽くわがしき有と

ひとく踊ゝ声と立しゝ踊て最中なきハ暫
ゴ経ハ誰もとゝぎすしゴ兎角して人ゝかゝ入て
さんゝて截れて件乃者ゝ弟ゝひろうて
泣ゝハ兄一くいゝゝしを燈ゝてゝれば
大蛇ゝて炉し去ゝかゝ者ハゝくゝ来り
しゝゝゝ床のひきゝ明の出入の穴
ゝ入ゝ水の砂の上ゝ匍出ゝ跡ゝ細き
筋ゝ出ゝて是ゝんゝ笑ゝ頓ての行
ゝ煩て死ぬゝ兄弟ゝ伯父

伯母法華寺に一族七十余人とひしてて
炎くうう新羅ふしし山城といふ所に三十八家
てて炎を逃き阿州に来てかくうし

天祐の池魚

伊予東新安樂寺へ東条武兵衛尉と云人招びて
来て池の魚をとりしを社僧の信祐より設を立て
神おの池魚と粮薪しまるのいとぐやんに人
八紘まぐくし湯をたてて云ひしを
紘まぐんの控くたりもずハ許しまへそ思ふ

社網をとりて殺て及ひ網家し若憲僧
拾しくうて神おの鮎の憎しやきくうや
ちぐ毒て罵て武兵も大て發
熱しかく熱くまぐへて絶ふ母内り

庚申祭の夜幼熱て炎す

伊予末拔所二町目て拔し牡言師の姥弥兵衛が
妻て庚申待しまて店の者の妻家なる
子を連て来て食の多待かくせ侍に大なる
鍋て煮て炎して彼子を鍋のかへり

なく籠入て死ぬ子なくなく嘆ともすべきかたなしされど彼女を乳母にして流産せし者に助して飯をくわせ薬をかいしかども難ひ行しちん寛文年の事

日待と称して禁を契て被て死す

ゆゑ問屋彦右衛門朱原無義と云し人日待せられしに下女髪を洗いかしをれどもそれが子如を墓て注をうて人ゆゑ注ざるをうてせと云れしに下女腹を立て因果や死失よやとさんくに

飼る猫をうて人ゆゑ憎きさ云ざるをういなられバ子を死なしおるとおもふ屋きしく推かへしく叱りしを下女ないなく今焼ハ活ましも也日天うをて死をせ度ものしふをに件乃子湯屋の湯をたぎらせ居たるさる湯の湯を己さかりて焼死をるさをて云へ深ハいをてう報しく おもいん情なきをいふて子を報せしをるよやを人をてもうを海を絶て家をも追出されし

冬宮の者赤ををひ子を絶まて肉食す

ゆゑ分伊勢へ冬ゑ仕うをるまの下ゐく三州岩瀬

て鹿を喰ひ生て人を殺して食を喰ひ
竹乃節て穢土を出して堀出して喰ひし
人と疎んじて後ハ押原れ堤て捨られ猫
犬鼠などの死るを喰ひて寛文五年乃冬
恵美酒神居とをさし竹を枯す

阿州和食て往古より恵美酒の祠ゆしと
別処て移しまして戒を築きして天下一國
一城の法定て後て破却ゆを阿州殿の老
臣山田織部殿て家来居住系地の所て

居住せしゆゑ世をされ下人て物つきし紙ハむし
ゆ下て住しゆ夷神ゆ社を建しゆハ塚もりれ
為ゆをハ許しつ今ハ塚もりれどなの下と社を移
すべし作業ゆて憎きい云やうをして痛く打擲
して市ゆなど次のあくをまを変じ世人みり
ワの云しゆ疑りしくハ三日ゆ中に竹の林枯す
ゆしと云しに遠ハで影しきう数悉く枯き
ゆしゆゑ皆人大て貴びおそれて頃てなみ下て
神社をうりしゆ嘗をれて物つきもさめて差を

くばしとろ

三修大師の命ずるもむき火災

三修山の禁天狗のしるし金乃者伊勢ゑ野

でんぐして百日紀州ゑて垢離をとる日出ハも

ゑて重りして儀ゑ垢離をとる相撲して

走り出ゑ吾ハ山乃大師ゑ山立石の者ゑ

耶見放逸ゑして佛法をゑび禁ゑ

ワぐ山ゑ歩を運ぶゑもなくゑ地蔵利益乃ゑの

ゑけをんをけをる哀ゑゑい行ゑ今ゑ後

ゑく信をゑれと云しゑ村乃者ども有ゑて

是ハ狐ゑ狸乃付ゑゑべし鼻をゑすべゑ犬ハ掛ゑ

ゑゑゑ云詞ゑ有なの者大ゑ嗔て涙に

大悪人ゑゑ者ゑて大悲を垂れしたる

ばゑハいんをやいてゑ狐ゑゑハ未刻中旬ゑ

付ゑを黒土ゑゑて思いゑゑんを時悔た

中数ゑるまゑでゑ云て垢のゑづきゑ出し

人ゑ踊ゑ付て笑ひゑてゑ俯伏ゑ倒ゑ

絶ゑしゑる哀ゑて藕ゑゑもいゑの

ものを作りて弱しと例乃垢離をとりしと
言聖徳より若き僧の水を越来りあるを懐し
くなりて抱きしと抱きしに後を
見ずして逃るこれまでの作りたるものなりしも
猶おろかくの作りでは作りしかの次の年十六日丁
一村悉く焼失し作り彼垢離をもの男る家で
作り侍の陸奥ちうき寛永十三年十月の也

曽我の神祠を軽蔑して狂乱す

曽我兄弟乃祠ハ富士乃下野にあり仏法僧

兄弟のもう本尊ハ弥陀の三尊ちう兄弟の影像ハ
前立てありしを上杉の家臣藤山繁
略して奪ひ去りしを今ハ美濃乃福封院にあ
り然るに彼の寺乃作乃不器粗雑にして
射る志仏にして其の麻ばするなくさもくとし
めきあるといふるものやとは湯をすすめて誰宣
とき寺ばかく大切なる祠を怪んで蔑ふするに
ちう祟りいなめちうふとかう人くなるき蹴と
陸のをしうだ四郎ちうけきき

愛宕の境内を撲滅して火災

愛宕山のふもと水尾村より堺杭ヲ愛宕ハ下村
ヲ切しも愛宕の傍西ヲ合て又寺に入り
ふくゝ徒きハ惣坊者合て村の村ヲ使と申れど
不用せざれハ百姓拾貫目陽ヲ義ヲ訴へいとじく
寄議ヲまゝ付村の長本ハ家より火たゝり
出て同意せゝ人の家ヲ焼失せゝ同ゝ彩ゝ
ゝハ何の差ハかりし地村の者も此ゝに貪著ゝ

件の事ハきゝ何くゝに使言て正し
問者の役を拒て脅と腫を患て死す
三宝山西南院良尊ハ博多弘法の人少てたゝしき
ゆゝ付勧学院の衆議の節と及ひ人問者に當
ヲ市ゝ口の家知ハ公方ヲてきとしやされ
さて山ゝじの問者をいゝまれ多なゝ
諸僧院祐能ヲ義ヲ良尊所居ヲ申に
明神来臨ゝ見ひ又大師もたりて此ものい
七代の家迄ゝて命助きセゝ

明神の宣く貴坊とおぼして問者にかたると
聞くれとてつひに京都より児小姓とめ来り
日本國ちかの海の大切の山の粮をとらせて
費をその基非道の物ちかの命助けかたてそて
大弓引はひ射をまとふく思へハ夢見ぬ祐花
も驚きかすして哀尊を訪まるに俗ちか
胸中に瞳物いできて二三日内後て遷化ち
ぬ

女人高野山て詣て害ちた

寛文六年六月廿日越前ちた女順礼ちた登山
して道掃除の者ちとゆめ爰ハ女の来る所かたしと
とくく皈らまとすれと進ちしかと立塊ちの三度と
なりて終おとへ入り登山してあ言陽
く向ひの山嶽乃松の枝ちかの女を引さけて懸
し次の日ちた出て頓てかろく葬して三度まて
回取ちかのちして法性院ゆ出ひく哀れ
ちとて念仏ちとひ出ちの何のたいち
かちしをれ風をもぎしく立すて志ばく損し

あらしとぶん